

6. コロンビアの日常4：家族の実態その4

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

ある見慣れない光景

朝、いつも近所の公園を歩いている。コロナ禍以前のことであった。その公園には多くの人たちが飼い犬と散歩しているのだが、ある日の事、公園の一角にたくさんのペット連れが集まっている。「何だろう？ペット好きの人たちの井戸端会議だろうか？」と想像している間にマイクロバスが来て停車した。「何じゃこりゃ？」マイクロバスの「乗客」は犬たちなのである。乗客間の喧嘩は無かった。一匹のシェパードと目が合った。《お前達はどこへ行くのだ？》車内に犬たちが「行儀良く」順番に入っていた後、1人の男性に事情を聞くと、「ペット預かり所」があり、そこで夕方まで預かってくれるということだった。時間になるとまたスクールバスのようにこの公園に連れて来てくれるという。そして希望があれば、訓練も受けられるそうだ。

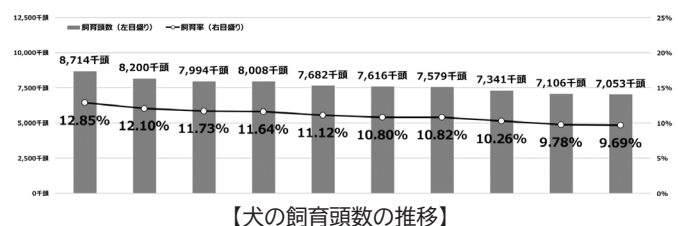
日本でもこのような施設があるかどうか、私は知識を持っていなかった。しかしながら、「ペットの保育園・幼稚園」などと呼ばれる施設は、すでに2000年頃から存在しているようだ。とはいえ、「スクールバス」でのペットの送迎はなかなかお目にかからないサービスだろう。

さて、家族の人員が減少する現代、コロンビアもその例外ではない。それならば、その代わりに陽気な性格であり、常に人と接触しがりのラテン民族の人たちはペットに家族の代替を望んでおり、そのためにペット飼育者が増えたのでは、と短絡的にそう考え、今回はそういう筋で書こうと考えていた。けれども、調べていくうちに、日本も含め、実際のペット状況はそう簡単ではなく、奥深いことが分かってきた。感染症が流行し、その収束ははまだ予測できない状況も関わっている。この実態についてコロンビアと日本の相似を述べることにする。

パンデミックの影響

日本とコロンビアのペット状況を考察すると、このコロナ禍（パンデミック）で少し差が出ている。日本の場合、コロナ禍の前と現在ではペットの総数はあまり変化がない。

「猫の飼育頭数は2013年以来緩やかに増加しているが、犬の飼育頭数は減少傾向。一方、1年以内新規飼育者の飼育頭数は、犬・猫共にコロナ前の2019年に比べ、2020年、2021年ともに増加となっている。」⁽¹⁾ 次のグラフは犬の飼育頭数の推移である。⁽²⁾



ところが、コロンビアでは新規のペット飼育者が日本とは異なり、右肩上がりのペット盛りである。以前からもペットの飼育数は増えてはいたのだが、コロナ禍で拍車がかかり、この5年間で84.9%の伸び率である。⁽³⁾ 2022年では全所帯数の43%がペットを飼育しているという。⁽⁴⁾

このようにペット需要は家族員の減少とともに少しずつ高まり増えていっているのだが、パンデミックでは新たな問題が浮上してきた。それはペットの放置である。

コロナ禍においては隔離やロックダウンが強いられ、また在宅時間が増え、かつストレスも増えて、生活の安らぎや癒しを望んでいる人たちは、ペットを飼うことに積極的であった。しかしながら、ペットを飼育することにおいて、「利点」もあるかわりに、飼育責任が生じる。ペットは生き物であり、飼育に手間がかかるのは当然の事だ。その上餌代、ワクチン代、医療代などの費用も

必要である。それは家族の一員と考えるなら必然かつ義務だろう。日本で子供の数とペット数を比較してみると、次のような指摘がある。

「総務省の発表によると、令和3年4月1日現在における子供の数（15歳未満人口）は、前年に比べ19万人少ない1,493万人で、昭和57年から40年連続の減少となり、過去最低となりました。片や、犬猫の飼育頭数合計は、令和3年度では1,605万頭と子供の数を大きく上回っています。」⁽⁵⁾ 一方コロンビアでは、1,090万人が子供の数であり、ペットの数は500万とも600万ともいわれている。

家族とペットと刹那的行動

「新型コロナウイルスの感染拡大で在宅時間が増える中、ペット人気が高まっている。一方、コロナ禍による経済的困窮で飼っていたペットを手放したり、安易な気持ちで飼いはじめた飼育が困難になったりする事例もみられる。」⁽⁶⁾ コロナ禍で、在宅時間が増えた、ストレスの軽減、人恋しい、などの理由で、飼育希望の人が増える一方、経済的困窮、飼育費用高騰、思い違い・勘違いで飼育放棄する人が出ているのが日本の現状である。⁽⁸⁾

少しペットに偏りすぎたかもしれないが、もちろん色々な要素があり、大変微妙で個人的な問題も絡みあっているのだが、コロンビア家族の調査を行っているうちに、子供を持たない、結婚しない、という世界的な現象になっているのも「我が身思索」と「責任の所在」と密接に関係していると思う。それはコロンビアも例外ではなく、この少子高齢化の中ペットを求めるものの、感染症の流行で経済的余裕がなくなり、手放してしまう。とくにコロンビアでは顕著であった。

冒頭に述べた公園ではペットの主人以外に「散歩係」「躰係」の人たちが散歩をさせているケースも少なくない。ペットを飼うということはどういうことなのかを考えさせられる。このように先の事を考えず、一時的なことにしか考えない刹那的行動はコロンビアと言わず、日本と言わず、日常での価値観として当たり前になって来ているのだろうか？

【註】

- (1) 一般社団法人ペットフード協会「2021年（令和3年）全国犬猫飼育実態調査結果」2021年12月22日。 <https://petfood.or.jp/topics/img/211223.pdf>
- (2) equall編集部「【2022年最新版】ペットの飼育頭数公開！犬は減少で猫は増加傾向・コロナウイルスやマイクロチップとペット市場規模、2023年-2024年の見通しも解説」2022年12月25日。 <https://media.equall.jp/archives/15331>
- (3) "Mercado de mascotas en Colombia: crecimiento durante 2021." Abril 21, 2021. <https://www.bancolombia.com/negocios/actualizate/tendencias/mercado-mascotas-2021/>
- (4) "Mascotas: ahora hay más animales que niños en los hogares." Mayo 01 de 2022. <https://www.portafolio.co/tendencias/mascotas-ahora-hay-mas-animales-en-la-familia-que-ninos-564824>
- (5) アニマル・ドネーション「ペットの数と種類」。 https://www.animal-donation.org/environment/domestic/database_jppet/
- (6) "Colombia aumentó su índice de vejez; cada vez hay menos jóvenes." 2019-07-05. <https://www.pulzo.com/economia/poblacion-por-edades-colombia-aumento-numero-personas-mayores-jovenes-PP726600>
- (7) 読売新聞オンライン「コロナ禍で安易に飼いたくなる犬猫、限界感じ手放す人も増加…専門家『寿命まで飼う覚悟して』」2022年1月14日。 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20220114-OYT1T50057/>
- (8) 「(2020年の) 新規飼育数 (推計) は、犬が前年比18%増の41万6000匹、猫は同16%増の46万匹。21年も犬猫ともにコロナ禍前を上回り、犬は39万7000匹、猫は48万9000匹だった。」(註7のサイトより)。しかしながら、2020年の前半期をすぎてからは逆に施設や保護団体に「引き取り」の問い合わせが増えているという。